

リスク社会論におけるローカリティの意味

萩原 優騎*

I. はじめに

ドイツの社会学者ウルリッヒ・ベック (Ulrich Beck) は、現代社会における科学技術と社会の関係を、「リスク (risk)」という観点から論じた代表的な論者の一人である。ベックの考察は多方面にわたって展開されてきたが、それらに共通しているのは、社会の諸側面においてリスクが主要な問題になっているという認識であった。このようなベックの議論のうち、本稿で注目するのは、リスクをめぐる問題のグローバルな次元とローカルな次元、そして両者の関係についてである。ベックの理論において、ローカリティについての位置づけは、思索の進展と共に変化してきた。一方、従来の傾向として、ベックの理論は、グローバルな次元に関わるリスクをめぐる議論として引用されることが多かった。その反面、理論のローカリティに関わる側面については、先行研究においてはあまり注目されてこなかった。本稿での検討作業は、そのような側面に光を当てるものである。ベックの思索の変化とはどのようなものであったのか、変化の結果が議論にどのような影響を与えてきたのかということ、主な検討の対象とする。この検討作業を通じて、ローカリティに関するベックの考察が抱える問題や今後の課題をも明らかにする。

はじめに、1980年代から出発して2000年代へ、そして晩年に至るまで、ベックの議論の変化の過程を順に見ていく。一口に「変化」といっても、そこには様々な論点が存在するゆえ、本稿の主題である、ローカリティに関わる部分に焦点を合わせて記述する。次に、ベックがグローバルなリスクに対する取り組みの可能性として掲げた構想について、その中でローカリティをめぐる問いがどのように論じられているのかという点に注目して検討する。それにより、構想の実現の過程で直面し得る困難の所在や、この構想においてベックが明確な問いの対象にしていない事柄があることを示

* 東京海洋大学学術研究院海洋政策文化学部部門准教授

国際基督教大学社会科学研究所研究員・教養学部非常勤講師

す。続いて、ベックの意図に反して、その理論が一種の「権力」として不当に機能し得る可能性があることを指摘する。そのような可能性がなぜ生じ得るのかということは、グローバルなリスクに対する取り組みに関するベックの記述における、ローカリティの位置づけを問うことを通じて明確になるものである。最後に、それまでの考察から見えてきたことを整理しつつ、今後の課題を示す。

II. 理論の変化

1. 1980年代の理論

ウルリッヒ・ベックは、1986年に刊行された主著 *Risikogesellschaft* (邦題『危険社会』)にて、現代社会は「リスク社会 (risk society)」であると論じた。リスク社会は、それまでの社会状況との対比で特徴づけられるものであるとされる。ベックによると、従来の近代社会は「産業社会 (industrial society)」である。産業社会は、19世紀に農業社会 (agricultural society) が近代化の過程で解体されることによって出現した。⁽¹⁾ 産業社会においては、科学技術が著しく発達した。それに伴って科学技術の影響力が増大した結果、自然と人間との関係は大きく変化することとなった。かつては、自然と人間、あるいは自然と社会は対立的に位置づけられることが多かった。しかし、今や「人間の外側の現象であった自然が内側の現象へと変化し、昔から存在していた自然現象が造られた現象へと変化したのである。自然は産業技術によって姿を変えられ、世界規模の市場で取り引きされるものとなった。その結果、自然は産業システムの内部に組み込まれた」。⁽²⁾ ただし、それは人間の自然に対する勝利を意味するわけではなかった。「自然を社会の一部とすることは裏からみれば、自然破壊を社会の一部とすることである」。⁽³⁾ 「自然破壊を社会の一部とする」とは、自然破壊が社会問題として位置づけられるようになるという意味である。

産業社会の進展に伴うこのような事態は、従来の様々な前提を掘り崩していく。そのことを、ベックは次のように表現する。「産業化が普遍的になると自然破壊は、システムに内在する政治的、経済的、社会的、文化的な矛盾そのものとなるであろう」。⁽⁴⁾ つまり、科学技術の在り方が社会の制度や価値との関連で改めて問われることになる。このようにして出現したのが、「リスク社会」と呼ばれる新たな状況である。「今日の近代化によって産業社会の輪郭は不明確なものになる。そして近代は連続的に発展するものの、そこにはいままでとは異なった別の社会形態が生じるのである」。このような近代化を、ベックは「再帰的近代化 (reflexive modernization)」と呼ぶ。それは、

もう一つ別のモダニティによる産業社会の「脱埋め込み (dis-embedding)」と、もう一つ別のモダニティによる産業社会の「再埋め込み (re-embedding)」である。⁽⁵⁾ ここで「もう一つ別のモダニティ」という表現が使われていることから分かるように、ベックの理解では、リスク社会の到来はモダニティの終焉を意味するわけではない。むしろ、産業社会がその変動によって諸前提と輪郭を解体し、別のモダニティへの道を切り開くという、モダニティの徹底化である。⁽⁶⁾ こうした変化を「再帰的」と形容するのは、それが自己言及的な性質を有するからである。すなわち、「科学は自らの生み出した物そのもの、自らの欠陥そして科学が生み出す結果として発生する諸問題と対決しなければならない」。⁽⁷⁾

リスク社会の到来は地球規模の現象であると、ベックは考える。近代化の進展に伴うリスクの特徴として、以下の点を挙げている。第一に、限られた地域の現象であると同時に、一つの場所に限定できない普遍的な規模の現象でもあるということ、第二に、その被害がもたらす影響は複雑で、予測や予想が極めて難しいということである。⁽⁸⁾ 第一の点が意味しているのは、問題の発生が特定の地域での出来事であったとしても、その影響は地域や国を越えて及ぶということである。こうした事態を、ベックは「他者」の終焉と表現した。それは、「人間同士が相互に距離を保てるように高度に発展してきた社会の終焉」である。⁽⁹⁾ その典型が、原子力発電所事故による放射性物質の拡散という問題である。ベックはチェルノブイリでの原発事故に言及して、それがリスク社会の象徴であると論じた。そして、リスク社会という状況は、階級間の対立のような従来モデルでは説明しきれないとされる。近代化に伴ってリスクが先鋭化し、その影響が及ばない地域が存在しなくなるということ、全ての人類が同一の文明のリスクに曝されるということが、問題になるからである。⁽¹⁰⁾ これらの記述からも明らかなように、当時のベックはリスク社会のグローバルな性質に主に焦点を合わせていた。そこでは、ローカリティについての言及は少ない。ローカリティに関わる議論は、先述のチェルノブイリの事例のように、特定の地域で発生した出来事がグローバルな現象でもあるという位置づけがなされている。

2. ロバートソンのギデンスへの批判

やがて、ベックの考察の至る所で、ローカルな次元に関わる事柄が強調されていくようになる。それは、自身の主張の諸前提を再検討する作業を重ねていった結果であった。ローカリティについて考察する際にベックが頻繁に言及しているのは、ローラン

ド・ロバートソン (Roland Robertson) の議論である。したがって、ベックの考察の変化がどのようなものであるのかということをはっきりさせるためには、先にロバートソンの議論を見ておく必要がある。ここではアンソニー・ギデンズ (Anthony Giddens) に対する批判に関わる部分に注目して、ロバートソンの主張を取り上げることにしたい。ギデンズは、ベックと並んで再帰的近代化やリスク社会を論じている社会学者である。両者の主張には、共通する部分も多い。その一例が、近代化とグローバル化 (globalization) の関係についての考察である。ギデンズの定義では、グローバル化とは、「さまざまな社会的状況や地域間の結びつきの様式が、地球全体に網の目状に張りめぐらされるほどに拡張していく過程」である。⁽¹¹⁾ そして、グローバル化はモダニティの進展という現象と連動しているとされる。「モダニティは、本来的にグローバル化していく傾向がある——この点は、近代の諸制度がもつ最も基本的な特性のなかに、とりわけ脱埋め込みと再帰性という一部の特性のなかに明示されている」。⁽¹²⁾

以下のように、グローバル化に伴う世界の一体性の出現を強調した表現が、ギデンズの主張には多く見られる。「グローバル化は、西欧の諸制度を世界中に浸透させてきただけでなく、その過程で他の文化を押しつぶしていった」。⁽¹³⁾ これに続いて、ベックが「他者」の終焉と表現した事態に、ギデンズは言及している。グローバル化という世界的規模の相互依存関係では、もはや「他者」は存在しないという。⁽¹⁴⁾ こうした主張に対して、ロバートソンは異議を唱えた。「ギデンズは、世界の諸社会のすべてが、初め西欧に起きた、高度の近代性の再帰性によって圧倒されていると考えているようである」。⁽¹⁵⁾ 個々のローカリティとグローバル化との関係はそのようなものではないと、ロバートソンは反論する。グローバル化された状況においてこそ、「他者」の問題は生じるという。⁽¹⁶⁾ そのように述べるのは、ロバートソンがグローバル化を次のように定義しているからである。それは、「世界を同質化し、個別性を抹消してしまう過程」ではなく、むしろ「本質的かつ内在的に個別主義を推進する過程」、すなわち「グローバルに多様性を推進する」現象である。⁽¹⁷⁾ グローバル化の進展に伴って、ローカリティや「他者」が消失するのではない。グローバル化の過程でそれぞれの社会や地域は、その独自性を確立する必要性を感じるようになるという。⁽¹⁸⁾ つまり、ローカリティが自覚されるということである。

ただし、ロバートソンのギデンズへの批判は一面的であると思われる。ヨーロッパの近代文明の波及というグローバル化の過程には様々な側面が存在すること、また、

その結果も多様であり得ることをギデンズは論じている。グローバル化という世界規模の相互関係において、「ローカルな出来事は、その出来事を形づくる拡大化した関係がたどる方向とは相対する方向に進展するかもしれない」のであり、「全体として同一方向への一連の変化を必ずしもたどらないし、また通例たどっていかない」とギデンズは述べる。⁽¹⁹⁾ ただし、このような状況は、近代化の影響がまさにグローバルであること、近代化の「他者」が存在しないことの一つの側面であると、ギデンズは考える。「近代的制度が世界中にますます拡大している反面、ヨーロッパないし西欧の有した世界規模の覇権が徐々に衰退している」のであり、それはモダニティの徹底化に伴うものであるという。⁽²⁰⁾ 今日の状態をモダニティの終焉ではなく徹底化であると見なしている点も、先に見たリスク社会に関するベックの見解と重なっている。また、ヨーロッパ以外にも近代化の影響が浸透した現状では、「モダニティは、西欧に特有のものではありえない」のであり、グローバル化に伴う諸問題への対処においては「非西欧的環境に由来する概念や戦略を必要としていくであろう」と、ギデンズは指摘している。⁽²¹⁾

3. 1990年代の理論

ローカリティに関するロバートソンの議論を取り入れながら、ベックは自らの理論を変化させていった。1990年代に刊行された著作には、その変化が顕著に見られる。ここでは、1997年の著作 *Was ist Globalisierung?* (邦題『グローバル化の社会学』)を参照して、具体的な変化の内容を確認する。同書では、「グローバリズム (globalism)」、「グローバリティ (globality)」、「グローバル化 (globalization)」という三つの概念を区別して、その定義の違いが論じられている。「この区別を用いる目的は、領土を基準にして政治的なるものと社会的なるものをとらえてきたオーソドックスな考えを打ち破ることにある。この考えは、第一の近代という国民国家的プロジェクトと同時に発生し、カテゴリーと制度とが結びついて絶対視されてきたものである」。⁽²²⁾ 「第一の近代」とは、モダニティの徹底化としての再帰的近代化が進行する以前の時期、すなわち、「産業社会」とベックが形容していた時期を指す。ここでベックが述べていること背景にある問題意識は、1980年代と基本的に変っていないと思われる。つまり、リスク社会の「他者」は存在しないというグローバルな性質についての認識であり、国家単位での議論や取り組みの限界を指摘するものである。

上に挙げた三つの概念の定義を、次に見ておきたい。「グローバリズム」とは、「世

界市場が政治的行為を排除する、あるいは政治的行為が世界市場に置き換えられるという見解である。すなわち、世界市場の支配というイデオロギー、新自由主義のイデオロギーである。そのイデオロギーは因果関係を単一のものに還元し、経済主義的にものごとをとらえ、グローバル化の多次元性を単線的に経済というひとつの次元に切り詰めてしまう。⁽²³⁾ このように、ベックは批判的な意味で「グローバリズム」という概念を使用している。次に、「グローバリティ」とは、「どんな国も、どんなグループも、互いを締めだすことはできない」ということである。⁽²⁴⁾ これは、先述した「他者」の終焉という状況に重なるものと理解してよいだろう。ここでは、「世界社会(world society)」という表現が用いられている。それは、「国民国家の政治に統治されない、あるいはそれによって規定されない(規定しえない)社会関係の総体である」。⁽²⁵⁾ 一方、「グローバル化」とは、一つの「過程」を指す概念であるとされる。それは、「その帰結として、トランスナショナルなアクター、そのアクターが権力を握るチャンス、彼らの行為の方向性、そして彼らのアイデンティティやネットワークによって、国民国家とその主権が裏をかかれ弱められていく過程」である。⁽²⁶⁾

以上の定義に基づいて、ベックはローカリティや「ローカル化(localization)」を重視した議論を展開していく。その際に主に依拠しているのが、ロバートソンの主張である。ベックはロバートソンを「文化のグローバル化の理論と研究の生みの親のひとり」と形容し、「グローバル化においてはつねにローカル化もまた問題になる」と述べる。⁽²⁷⁾ この表現が意味していることは、以下の箇所でも明確に述べられている。「ロバートソンは、ローカルなものごとグローバルなものが互いに排除しあうものではないことを論じている」のであり、「ローカルなものはグローバルなものの一側面だと考えなければならない。グローバル化とはまた、いくつものローカルな文化が集まり互いに会うことであって、ローカルな文化はこの『ローカル性の衝突』において、内容のうえで新たに規定されなければならない」。⁽²⁸⁾ こうして、ベックの議論において、ローカリティに関する考察が重要な位置を占めるようになる。ただし、後述するように、ベックはリスク社会のグローバルな性質に関する見解を改めたわけではない。ここでベックが強調しているのは、「われわれは自分の生活と行為、組織と制度を『ローカールーグローバル』という軸にしたがって位置づけ直し、再組織化しなければならない」ということである。⁽²⁹⁾

Ⅲ. 残された課題

1. 2000年代以降の議論

2000年代以降、ベックはローカリティに関する議論をさらに展開していった。その中で頻繁に使われているのが、「コスモポリタン (cosmopolitan)」という概念である。この概念は、先に検討した1990年代の著作でも既に使用されているが、2000年代以降の著作にて、考察がより深められていった。その過程で、ベックは従来の自身の議論の諸前提を批判的に問い直すという作業を繰り返していく。ベックは、かつての自身の主張は「普遍主義 (universalism)」であったと見なして、次のように論じた。「それは、近代と近代化についての伝統的理論と一連の基本的前提をすべて共有していた。なかでもそれは、その規範や原理が早晩世界規模で適用されうるし、されるべきであると前提しているという意味で、普遍主義的主張を共有していた。しかしこの考えを修正し、『コスモポリタンな〔複数の〕近代』の理念と交代させなければならない。私は、再帰的近代化の過程は実際に普遍的であり、つまり産業主義的近代化の制度を変更する副作用が多様なかたちで観察されうると、主張する。私は逆に、再帰的近代化の過程は、あらゆる場所で、同じやり方で生じ、そして同じ結果を生んでいるとは主張しない。まったくその反対だ。すなわち、再帰的近代化の過程は、歴史的・一経験的にきわめて偶有性をもっている」。⁽³⁰⁾

この引用箇所から確認できるのは、再帰的近代化という現象が地域を越えてグローバルに進展するという、1980年代以来の認識が維持されているということである。ただし、再帰的近代化の進行過程や結果は、地域によって様々であり得るという。これは、1990年代における理論の変化によって到達した認識であろう。再帰的近代化が多様であり得るとすれば、それぞれのローカリティの個性を視野に入れて、この現象を観察し記述しなければならない。そのことを、ここでは「コスモポリタンな〔複数の〕近代」と表現している。また、「コスモポリタン」ということを論じるに当たって、「コスモポリタニズム (cosmopolitanism)」と「コスモポリタン化 (cosmopolitanization)」を区別することが重要であると、ベックは指摘している。自身の理論において、再帰的近代化との関連で扱うのは後者であるという。「コスモポリタニズム」とは、「意識的・自発的な選択による課題」であるのに対し、「コスモポリタン化」は、グローバルな「他者」の終焉、強制的で混成的な現象である。⁽³¹⁾つまり、コスモポリタン化とは、「他者」の終焉、あるいは、1990年代には「グローバリティ」と表現していた事態を言い換えたものであり、それは人々が否応なしにその

影響下に置かれる状況であると言える。

晩年のベックはコスモポリタン化に関する研究を進めていく過程で、グローバルな次元とローカルな次元の関係を連結するものとして、「都市 (city)」という単位に注目した。「国家は、世界的・コスモポリタンのリスクに直面して、利己主義的な支配という虚構から抜け出せずにおいて、失敗する。だが都市は、国家的な器という虚構の中に閉じ込められてはいない。それどころか、歴史的に都市は自立した地位を占めてきた。都市は世界的なリスクに直面して、協力によるコスモポリタンの政治に対して、より門戸を開いている」。(32) 一方でベックは、国家等に対抗する勢力としての社会運動からも、一定の距離をとった議論を展開している。「社会運動は、コスモポリタンのな粹組みづくりにとっては重要だが、集団として拘束力のある意思決定を作り出すことはできない。唯一の立法力を有する国民国家が存在するのはこのためだ。しかし、国民国家の影響力は薄れつつある。集団として拘束力のある意思決定を行う上で、世界都市がより重要な場となりつつあるのだ」。(33) そのような都市が集まって、「世界都市連合」が誕生することを、ベックは期待する。さらに、都市間の相互関係は、「想像のコスモポリタンのリスク・コミュニティ」と呼ばれる。それは、「情報を交換したり、共通の問題について話し合ったりするために定期的集まるという以上のもの」であり、立法と政治的意思決定が一体となったプロジェクトや、都市の境界を越えた市民参加の形態などが挙げられるという。(34)

2. 「コスモポリタンな協力」は可能か

このようにベックの議論は展開されてきたが、構想を実現しようとするに際して、どのような課題があるのだろうか。多様なローカリティを背景としつつ、地域を越えたリスクという共通課題への取り組みに向けて、地域相互間の協力関係を通じたグローバルなコミュニティを構築し得る条件を、ベックは提示した。『「コミュニティの構築が可能なのは、価値観と規範の共有を通じたプラスの融合に基づいている場合のみである』という社会科学における一般的な前提を捨てなければならない」のであり、「別の形のコミュニティ——マイナスの価値観（危機、リスク、絶滅の恐れ）をめぐる対立の過程で生まれるコミュニティ——の構築も可能である」という。(35) そうした可能性は、確かにあり得るかもしれない。一方で、1980年代の時点でベック自身が提起していた以下の点も、視野に入れるべきだろう。リスク社会では、人々は「安全」を求めるが、それが必ずしも実現するとは限らず、「不安」を覚えるという。そのため、

階級社会に見られる「欠乏」の共有に代わり、リスク社会では人々は不安を共有し、不安に基づく連帯が政治的な力になる。⁽³⁶⁾しかし、「物質的な欠乏と異なり、不安は、政治的な運動の理由としては、不安定といえるのではないか。不安を共有したとしても、反対の情報が隙間風のように少し入り込んだだけで、その共有は解消してしまうのではなからうか」。⁽³⁷⁾晩年のベックは、リスク・コミュニティの構築について肯定的に論じることが多かったが、その可能性や条件を検討する場合、上記の論点は重要な意味を持つはずである。

次に、ベックが掲げる図式の前提に対しても批判が向けられていることを挙げておきたい。ベックによると、リスクは「それが及ぶ範囲内で平等に作用する」ゆえに「社会的な格差や区別は相対的なものになる」のであり、「新しいタイプの政治的な力は、まさにここにある」という。⁽³⁸⁾松本三和夫はこの箇所を引用して、リスクの問題を社会学の観点から扱った言説においては、「意思決定の主体が一枚岩であるかのように地球上の人類全体が想定されるか、あるいは、安全なところにおいてリスクの及ばない人とそうでない人といった、いささか戯画的な二分法が実体化されるかのどちらかであることが多い」と述べる。⁽³⁹⁾前者の典型が、ベックのリスク社会論であるという。「現実には、リスクをめぐる意思決定にかかわる主体は、人類全体でもなければ、対立的な二者でもない場合が圧倒的に多い」のであり、「人類全体と個人のあいだには社会関係、集団、組織、制度といった互いに水準を異にするさまざまな要因が介在する」。⁽⁴⁰⁾単純化された図式は現実離れしていると、松本は批判する。それは、「元来きめ細かに帰責先を特定すべき状況であるにもかかわらず、その必要がないかのようにあらかじめ決めてしまうことになりかねない」。⁽⁴¹⁾これらの指摘は、グローバルな次元とローカルな次元との対比や、両者の関係性についての記述のみに依拠した考察からは、ほとんど見えてこないものである。

もう一つは、2000年代以降のベックの議論の枠組みに基づく考察や提言の適用範囲に関わる問いである。ベックは再帰的近代化論を再定義するに当たって、次のように述べていた。これまで自身が展開してきた理論における基本的な概念が「さまざまな社会的そして歴史的状況において使用可能になるには、それらは脱構築化され再定義されなくてはならない」のであり、それは「再帰的近代化の初期の理論がもつ普遍主義的な前提や期待を自己批判すること」、再帰的近代化論が「自らコスモポリタン化しなくてはならない」ということである。⁽⁴²⁾このことを、自身の理論の「コスモポリタンの転回」とベックは形容する。そして、ベックはヨーロッパ以外の地域の研

究者たちとの共同研究を展開することなどを通じて、再帰的近代化論を自ら批判的に問い直す作業を実践した。それは、再帰的近代化のグローバルな性質を前提としつつ、それぞれの地域の個別的状況をも視野に入れた議論を展開できるように、理論を彫琢していくという作業であった。すなわち、普遍性を指向しながら実際にはヨーロッパというローカリティの諸特徴を前提としていた再帰的近代化論を、ヨーロッパ以外の地域の再帰的近代化をも記述できる理論へと組み替えるという試みであった。その一つの事例として、日本における東日本大震災の発生とその背景、それ以降の日本社会の状況や課題について、ベックは積極的に発言した。

福島での原子力発電所事故の発生は、ベックにとってはリスク社会とそのグローバル化の象徴の一つである。なぜなら、福島で発生したローカルな事象としての原発事故の影響は、地域や国を越えたグローバルなものだからである。そこにおいて、原発事故の帰結が国境を越えていく一方で、建設の決定に関わる主権を国民国家が持っているのは矛盾であるという。⁽⁴³⁾ これは、国民国家という枠組みはリスクのグローバル化という状況には必ずしも適合するものではないという、以前からの主張を福島の事例に当てはめたものである。一方で、ベックはこの状況を別の角度から捉える可能性もあることを示唆する。「国境を越えて損害を及ぼす大きなリスクは、国際紛争の原因になりかねない。[しかし]同時に、こうしたリスクは新たなチャンスを開く——つまり、コスモポリタンな協力を呼びかけるのである」。⁽⁴⁴⁾ このように述べて、日本の直面する課題と、それに対する行動への期待をベックは表明した。「日本を世界に対して開くこと」によって、「罹災し危機に陥った日本にとってむしろ望ましい、危機を脱する道が拓かれるのかもしれない。政治構造と政治行動がコスモポリタンになれば、ナショナルな利害の促進もそれだけ効果をあげ、グローバル時代における日本の重要性もますます高まるであろう」という。⁽⁴⁵⁾

このようにベックの主張は極めて前向きなものであるが、日本社会はそれほど容易に「コスモポリタンな協力」への実践の可能性に開かれるのだろうか。日本社会ではリスクは社会的統合の機能を果たし得ず、むしろ社会の分断の契機にさえなっていると、櫻村愛子は指摘する。⁽⁴⁶⁾ ベックの議論がローカリティを重視しようとしていることは確かであるとしても、それぞれの社会や文化の個性や特徴を十分に視野に入れた考察を展開するには未だ至っていないと言わざるを得ない。そのような点を深く分析した上での提言でなければ、「コスモポリタンな協力」はいつまでも理想論にとどまり、その実現可能性へと検討を進めることはほぼ不可能であると言えよう。また、

ローカリティを重視する姿勢を徹底することで「コスモポリタンな協力」の実現に至るといように、両者の間に連続性を常に想定できるという前提は、正しいとは限らない。例えば、地元友達によるコミュニティの形成は現代の日本社会の特徴の一つであるが、それは「イデオロギーを超えて繋がりやすい側面とローカルな感情交流にとどまりやすい側面を持ち、ローカルな共同性は、ベックの関心でいうところのコスモポリタン性をもちづらだろう」。(47)

3. リスク社会論の権力性

最後に触れておきたいのは、ベックのリスク社会論が、社会の様々な場面で参照され論じられることに伴って生じ得る事態である。それは、リスク社会の特徴を述べた言説が、おそらくベックの意図に反して、一種の「権力」として機能し得るということにほかならない。確かにベックの主張には、リスクに関わる格差をめぐる問いが含まれている。その一つが、リスクが及ぼす影響の非対称性についての主張である。ベックによると、リスク社会においても、産業社会に見られた階級間の対立としての貧困問題は解消されたわけではない。リスクは下方へ集中する傾向にあり、下層階級では生活が困窮しているばかりでなく、その安全性が脅かされていると指摘する。(48) また、リスクと知識との関係にも、ベックは言及している。現代社会における科学技術に由来する各種のリスクを認知するには、科学技術に関わる知識が不可欠である。「この知識というのは自分の経験からきたものではない。そしてもう一つ重要なのは、そのような知識に非常に深く依存している点である」。(49) つまり、科学技術に関わる知識は人々が日常において自然に獲得できるものではなく、意識的に習得されるものであり、また、そうした知識なしには、リスクを正確に把握したり、その把握に基づいて適切に行動をとったりすることは難しい。そのような状況ゆえに、リスクに曝されたことを知り得るのは高学歴者か情報感度の高い人々であり、豊かで安全性の高い国々においてこそリスクに対する意識も反対運動も発達している。(50)

そして、貧富の格差と知識の格差が重なり合い、さらに問題を増幅させる場合もある。人々にリスクが知覚されるかどうかということと、リスクが現実を広がっていることは、はっきりと区別しなければならないと、ベックは指摘する。(51) この論点を無視するならば、問題は放置されたままになりかねない。「貧困をなくす」という大義名分の下で、人々が知覚し得ないリスクを無視することによって、第三世界においてはリスクが正当化されてきた。(52) このような状況が続く限り、リスクはさらに増

大し、人々の生活をますます脅かすことになるかもしれない。また、「被害」ということを一面的に捉えることの危うさに関しても、ベックは問題提起している。「生物学的被害が直ちに社会的な被害であるとする誤った推論もあれば、人間が被害を受ける場合特定の人々に重い事実や、被害が社会的、文化的意味を有する事実を一切考慮の外に置く推論」もあり、「同一の有毒物質が、年齢、性別、食習慣、職業、情報、教育などの点で、異なった人間に対しては、全く異なった意味を有しうることが忘れられがちである」。⁽⁵³⁾ 貧富の格差や知識の格差に由来するリスクの非対称性は、「リスクのグローバル化」という一般論においては見落とされやすい。それぞれのローカルな場面で、リスクがどのように生じ、どのように影響を及ぼしているのかということを見ることができ、十分に捉えることができるものである。

以上のように、リスク社会に関わる各種の格差の問題を、ローカルな場面の個性をも視野に入れつつ、ベックは積極的に論じてきた。なお、ここに引用したのは、1980年代に展開された主張のみであり、以降も様々な機会に関連する論点に言及している。1980年代当時の議論の全般的な傾向としては、ローカリティに関わる問題は必ずしも主題になり得ていない。しかし、格差をめぐる問題を検討する過程では、ローカリティへの着目の必要性が、間接的にはあるが示されていると言えるだろう。それにもかかわらず、ベックはリスク社会を論じる中で、現代社会におけるリスクはグローバルな性質を持つということを、時には過剰と思えるほど強調してきたことも事実である。そうした傾向は、1980年代以降も大きな変化は見られない。本稿でのこれまでの検討からも確認することができたように、それぞれのローカリティの個性の記述を重視するようになって以降も、ベックは「コスモポリタンな協力」というグローバルな次元を考察の主題としてきた。リスクのグローバルな性質を強調することは、それぞれのローカルな場面で生じるリスクやその影響、そして上述のような格差に由来する問題を見えにくくしてしまうという効果をもたらす場合がある。例えば、リスクを作り出す者もそれによって利益を受ける者もその影響下に置かれること、富める者や権力を有する者も安全ではあり得ないことから、リスクは階級の図式を破壊する効果を内包していると、ベックは主張する。⁽⁵⁴⁾ また、リスクが増大し始めると、それがもたらす利益と不利益の差異はたちまち消滅してしまうのであり、それはリスクの共有現象であるという。⁽⁵⁵⁾

こうした言説は、ベックの意図に反して、リスクの発生に伴う責任の所在を曖昧にするために利用される可能性を否定できないのではないか。例えば、ベックもリスク

社会の典型例として挙げることが多い気候変動問題に関わる言説に対して、以下のよう
な批判が提起されている。「この問題を『みんなが加害者』だといってすませること
など許されない」のであり、「社会の構造のなかにまぎれもなく存在する『加害』
の立場にあるものは気候変動問題においても特定されうるし、また特定されなくては
ならない」。⁽⁵⁶⁾ 同じことは、被害者にも当てはまる。「気候変動問題の『被害』の立場
にあるものも特定できる。そして、加害の立場にある人びとと被害の立場にある人び
とが、多くの場合、まったく重ならないことも重要な問題である。『みんなが同じく
加害者、みんなが同じく被害者』などといえたものではない」。⁽⁵⁷⁾ ただし、こうした
問題に陥る可能性を孕んでいるからといって、リスク社会論の意義や、この理論を用
いて考察することの可能性を全て否定してしまうことは適切ではないだろう。また、
そのような批判にとどまっているのでは、根本的な解決にはならない。ベックの言説
が発揮し得る様々な効果に対する反省的な視点を常に持つと共に、その言説が不当に
利用されたと思われる事態が発生した場合には、実態を批判的に分析して、問題点を
明らかにする作業が必要であろう。

V. おわりに

本稿では、ベックの理論の変化の過程をたどりながら、その理論においてローカリ
ティがどのような意味を持っているのかという点を見ることから出発した。その後、
ベックの晩年の主張や、立ち入った批判的な考察が行われてこなかった論点について、
さらに問われなければならないことや、残された課題がどのようなものであるのかと
いうことを、それらの議論におけるローカリティの位置づけを問うことを通じて明ら
かにした。以上の作業から見てきたのは、ベックが自らの理論を批判的に再検討し
てきたこと、リスク社会においてローカリティを適切に位置づける必要があると考
えて、その可能性を模索してきたことであった。他方で、そのような取り組みにもか
かわらず、さらなる検討を要する課題が山積していることも、本稿での考察を通じて、
より明確になったと考える。特に晩年の議論に至って初めて登場する論点には、十分
な探究がなされないままになっているものが多い。また、ベックの議論がその想定に
反する効果を発揮した場合に生じ得る問題について、十分に自覚されていたとはい
いがたい。そうした点については、ベックの理論を参照して研究を行う一人一人が、こ
れからの課題として取り組まなければならない。そのことは、本稿自体にも当てはま
る。本稿は、ベックの議論を批判的に検討することによって、このような課題に取り

組もうとした一つの試みである。同時に、本稿で展開した考察それ自体も、今後の研究を通じて再検討を重ねていく必要がある。⁽⁵⁸⁾

最後に、本稿で述べた事柄との関連性はあるが、論考の趣旨を明確にするために、あえて言及しなかった論点があることを記しておきたい。一つは、リスク社会の諸問題への取り組みに関わる具体的な実践において、自らの理論がどのように活用され得るのかということ、ベックはほとんど検討していないという問題である。ベックが構想する「コスモポリタンな協力」が社会学を専門とする研究者以外にも開かれた、むしろそのような人々が主な担い手となり得るものであるならば、その人々がどのように理論を活用すべきなのか、どのように学びを深めることが可能なのか、理論は現場での実践とどのような関係を持ち得るのかといった問いが不可欠である。⁽⁵⁹⁾ もう一つは、ベック自身による考察や、あるいはその理論に依拠した研究が、公表されたり実践の場面で活用されたりすることがもたらし得る影響をめぐる問いである。この点も、ベックの主たる関心の対象にはなっていない。あらゆる観察に対して、「この観察はどんな区別を用いているのか、その結果としてこの観察によって何が不可視になっているのか」という問いが発生する。⁽⁶⁰⁾ ある理論を用いた観察や記述の結果として、そのパースペクティブの外部が必然的に発生するのであり、その「外部」というリスクをも問わなければならない。ここに挙げた二つの論点は、ベックの理論を参照して議論を展開する際に、そして個々の現場に関わる際に、研究者が常に念頭に置いておくべき重要な課題である。

注

- (1) Beck (1986), S.14 (邦訳 10 頁)
- (2) ebd., S.9 (邦訳 4-5 頁)
- (3) ebd., S.10 (邦訳 5 頁)
- (4) ebd., S.252 (邦訳 314-315 頁)
- (5) Beck, Giddens & Lash, p.2 (邦訳 12 頁) 「再帰的近代化」との対比で、初期の近代化、すなわち産業社会の成立における近代化は、「単純な近代化 (simple modernization)」と呼ばれる。それは、産業社会という社会形態による伝統的社会形態の「脱埋め込み」と、産業社会による伝統的社会形態の「再埋め込み」である [Ibid. (邦訳 11-12 頁)]。なお、ここでベックは「脱埋め込み」及び「再埋め込み」という概念について、明確な定義を与えていない。
- (6) Ibid., p.3 (邦訳 13 頁) それは資本主義の危機ではなく、資本主義の勝利こそが新たな社会形態を生み出したのだと、ベックは論じる [Ibid., p.2 (邦訳 12 頁)]。
- (7) Beck (1986), S.254 (邦訳 317-318 頁)
- (8) ebd., S.36 (邦訳 37 頁)
- (9) ebd., S.7 (邦訳 1 頁)
- (10) ebd., S.62-63 (邦訳 71 頁)
- (11) Giddens, p.64 (邦訳 85 頁)
- (12) Ibid., p.63 (邦訳 84 頁) ここに登場するそれぞれの概念について、ギデنزによる定義を確認しておきたい。モダニティとは、「およそ 17 世紀以降のヨーロッパに出現し、その後ほぼ世界中に影響が及んでいった社会生活や社会組織の様式」である [Ibid., p.1 (邦訳 13 頁)]。「脱埋め込み」とは、「社会関係を相互行為のローカルな脈絡から『引き離し』、自空間の無限の拡がりのなかに再構築すること」である [Ibid., p.21 (邦訳 35 頁)]。「再帰性 (reflexivity)」とは、「社会の実際の営みが、まさしくその営みに関して新たに得た情報によってつねに吟味、改善され、その結果、その営み自体の特性を本質的に変えていく」ということである [Ibid., p.38 (邦訳 55 頁)]。
- (13) Ibid., p.175 (邦訳 216 頁)
- (14) Ibid. (邦訳同上)
- (15) Robertson (1997)、14 頁
- (16) Robertson (1992), pp.144-145
- (17) Robertson (1997)、5 頁
- (18) 同上、13-14 頁
- (19) Giddens, p.64 (邦訳 85-86 頁) その一例として、ナショナリズム感情の高まりが挙げられている。「社会関係が横に広がっていても、それにもかかわりなくまさにその過程の一環として、地域の自治権や文化的アイデンティティを求める圧力は、高まりを見せている」[Ibid., p.65 (邦訳 86 頁)]。
- (20) Ibid., p.51 (邦訳 70 頁)
- (21) Ibid., p.175 (邦訳 216 頁)
- (22) Beck (1997), S.26 (邦訳 26 頁)
- (23) ebd. (邦訳同上)
- (24) ebd., S.28 (邦訳 28 頁)

- (25) ebd. (邦訳同上)
- (26) ebd., S.28-29 (邦訳 29 頁) ただし、同書での「グローバル化」の定義には揺れがある。別の箇所では、「さまざまな次元で、日常の行為が国境に制限されなくなるのを経験できるということ」、「距離の消滅であり、望んでもいないしとらえることもできないトランスナショナルな生活に投げ込まれた状態」と「グローバル化」を定義している [ebd., S.44-45 (邦訳 46 頁)]。これらは、「グローバルリティ」の定義にほぼ重なると思われる。その意味では、両者の区別は必ずしも明確ではないと言わざるを得ない。
- (27) ebd., S.85 (邦訳 93 頁)
- (28) ebd., S.90 (邦訳 99 頁) 同書でベックも言及しているように、このようなグローバル化とローカル化の関係を、ロバートソンは「グローカル化 (glocalization)」と呼んだ。それは、単一性によって特徴づけられるものとしての世界像と、「他者」の場としての世界像は両立するということである [Robertson (1992), p.145]。
- (29) Beck (1997), S.30 (邦訳 31 頁)
- (30) ベック (2011a)、20 頁
- (31) ベック (2011c)、147 頁
- (32) Beck (2016), p.164 (邦訳 191 頁)
- (33) *Ibid.*, p.45 (邦訳 51 頁) 都市という単位的重要性について、気候変動を例に挙げて説明している。「都市においては、気候変動は目に見える影響をもたらすし、気候変動が革新を奨励するからだ。そして国境を越えて協力と競争が行われるし、気候変動への政治的対応が、政治的な正当性と権力のローカルな源泉として機能する」 [*Ibid.* (邦訳 51-52 頁)]。
- (34) *Ibid.*, p.165 (邦訳 192 頁)
- (35) *Ibid.*, p.170 (邦訳 198-199 頁)
- (36) Beck (1986), S.66 (邦訳 75 頁) ベックによると、階級社会としての産業社会において、主要な問題は貧困である。「階級社会の発展力は、平等という理想とつねにかかわっている。(例えば『機会均等』に始まって、社会主義的な社会のさまざまなモデルに至るまで、多様な形態の理想が見られる)」という [ebd. (邦訳同上)]。一方、「リスク社会の基礎となり、社会を動かしている規範的な対立概念は、安全性である。リスク社会には、『不平等』社会の価値体系に代わって、『不安』社会の価値体系が現れる。平等というユートピアには、社会を変革するという、内容的にも積極的な目標が多い。一方、安全というユートピアは消極的で防衛的である。ここでは、『良い物』を獲得することは、もはや本質的な問題ではない。最悪の事態を避けることだけが関心事となる」 [ebd. (邦訳同上)]。
- (37) ebd. (邦訳 76 頁)
- (38) ebd., S.48 (邦訳 51 頁)
- (39) 松本、23 頁
- (40) 同上、24 頁
- (41) 同上
- (42) ベック (2011a)、28 頁
- (43) ベック (2011b)、8 頁
- (44) 同上

- (45) 同上、12 頁
- (46) 櫻村、59-60 頁 「不安」が言及されず排除されるならば、社会的統合機能は発揮されない [同上、60 頁]。その場合、先に引用した箇所ではベックがリスク社会の特徴として考察の前提としていた、人々が不安を共有し、不安に基づく連帯が政治的な力になるということは、自明であるとは言えない。
- (47) 同上、63 頁
- (48) Beck (1986), S.46 (邦訳 48-49 頁)
- (49) ebd., S.70 (邦訳 81 頁) これに対し、従来の産業社会の「階級状況では、この状況を想定している潜在的な脅威、例えば失業などは、当事者に自明な事実である。それを知るためには何も特別な知識手段を要しない」、つまり「脅威に曝されていることは明白であり、この意味で知識に依存していない」[ebd. (邦訳同上)]。
- (50) ebd., S.69 (邦訳 80-81 頁)
- (51) ebd., S.59 (邦訳 66 頁)
- (52) ebd. (邦訳 67 頁)
- (53) ebd., S.34 (邦訳 34 頁)
- (54) ebd., S.30 (邦訳 29 頁) この一文は、リスクの増大に伴い、それが「いくつかの階層もしくは階級に集中するという不公平」が生じるという論点に続けて書かれたものである [ebd. (邦訳同上)]。このことから、ベックがリスク社会のグローバルな性質をより強調していることを理解できるだろう。
- (55) ebd., S.62 (邦訳 71 頁)
- (56) 高田／林／五十嵐／井上、34 頁
- (57) 同上、35 頁
- (58) その検討作業は、場合によっては社会学以外の領域も含む様々な観点から、多重的に行われる必要がある。このように考える理由については、以下の拙稿を参照。萩原優騎「現代社会における合意形成の困難——リスクに関する諸理論を参照して」、『社会科学ジャーナル』第 85 号、2018 年。
- (59) この点については、以下の拙稿で論じた。萩原優騎「環境倫理学のグローバルな次元とローカルな次元の関係——ウルリッヒ・ベックの再帰的近代化論を参照して」、『共生科学』第 9 号、2018 年。
- (60) Luhmann, S.47 (邦訳 29 頁)

参考文献

- 榎村愛子「二〇一〇年代の日本における個人化とベックの理論」、ウルリッヒ・ベック／鈴木宗徳／伊藤美登里編『リスク化する日本社会——ウルリッヒ・ベックとの対話』岩波書店、2011年。
- 高田研／林美帆／五十嵐有美子／井上有一「公害教育——環境教育の原点から未来をつむぐ」、井上有一／今村光章編『環境教育学——社会的公正と存在の豊かさを求めて』法律文化社、2012年。
- 松本三和夫『テクノサイエンス・リスクと社会学——科学社会学の新たな展開』東京大学出版会、2009年。
- Beck, Ulrich. *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Suhrkamp, 1986. (東廉／伊藤美登里訳『危険社会——新しい近代への道』法政大学出版局、1998年。)
- Beck, Ulrich. *Was ist Globalisierung?: Irrtümer des Globalismus – Antworten auf Globalisierung*, Suhrkamp, 1997. (木前利秋／中村健吾訳『グローバル化の社会学——グローバルイズムの誤謬—グローバル化への応答』国文社、2005年。)
- ウルリッヒ・ベック「個人化の多様性——ヨーロッパの視座と東アジアの視座」、ウルリッヒ・ベック／鈴木宗徳／伊藤美登里編『リスク化する日本社会——ウルリッヒ・ベックとの対話』岩波書店、2011年 a。
- ウルリッヒ・ベック「この機会に——福島、あるいは世界リスク社会における日本の未来」、ウルリッヒ・ベック／鈴木宗徳／伊藤美登里編『リスク化する日本社会——ウルリッヒ・ベックとの対話』岩波書店、2011年 b。
- ウルリッヒ・ベック「第二の近代の多様性とコスモポリタンの構想」、ウルリッヒ・ベック／鈴木宗徳／伊藤美登里編『リスク化する日本社会——ウルリッヒ・ベックとの対話』岩波書店、2011年 c。
- Beck, Ulrich. *The Metamorphosis of the World*, Polity, 2016. (枝廣淳子／中小路佳代子訳『変態する世界』岩波書店、2017年。)
- Beck, Ulrich, Anthony Giddens & Scott Lash. *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*, Polity, 1994. (松尾精文／小幡正敏／叶堂隆三訳『再帰的近代化——近現代における政治、伝統、美的原理』而立書房、1997年。)
- Giddens, Anthony. *The Consequences of Modernity*, Stanford University Press, 1990. (松尾精文／小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か？——モダニティの帰結』而立書房、1993年。)
- Luhmann, Niklas. *Beobachtungen der Moderne* (2. Auflage), VS Verlag, 2006. (馬場靖雄訳『近代の観察』法政大学出版局、2003年。)
- Robertson, Roland. *Globalization: Social Theory and Global Culture*, Sage, 1992. (阿部美哉訳『グローバルイゼーション——地球文化の社会理論』東京大学出版会、1997年。)

※ (Robertson, 1992) の邦訳 (Robertson, 1997) は部分訳である。また、邦訳の冒頭には、原著にはない「序章 日本の読者へ」がある。邦訳のページ数のみを記すものに関しては、ここからの引用である。

Meanings of Locality in Risk Society Theory

<Summary>

Yuki HAGIWARA

Ulrich Beck is a sociologist famous for his risk society theory. He kept revising his theory focusing on the relationship between the global and local dimensions of risks in the contemporary society. At first he exaggerated the risks caused by the contemporary science and technology is global, but he gradually became interested in the variety of the processes and the results of modernization. The purpose of this paper is to analyze how he revised his theory and clarified the meanings of locality in risk society theory.

When Beck proposed risk society theory in the 1980s, he mainly focused on the characters of global risks. The origin of global risks is modern European society which started as an industrial society. As a result of radicalization of modernity under the influence of science and technology, the situation which is called risk society appeared. This process is named reflexive modernization. All the people in the world cannot escape from the global risks now.

In the 1990s Beck started to revise his theory by referring to Roland Robertson. According to Robertson, globalization is not a phenomenon extending in one direction. When the waves of globalization rush, the process of localization starts because traditions as a basis of a stable daily life in the concerned area are not self-evident anymore. Variety of locality will not disappear through the process of globalization. Globalization and localization are the two sides of the same coin.

After the 2000s, Beck often explained the importance of cosmopolitan cooperation all over the world to address global common issues. He distin-

guished cosmopolitanization as a sociological phenomenon from cosmopolitanism as a philosophical idea. Cosmopolitanization means that reflexive modernization is inescapable though its processes and results are various. The key of cosmopolitan cooperation is the function of cities which connect the global and local dimensions of decision-making.

However, it is not clear how and in what conditions people can actualize cosmopolitan cooperation. Many people feel anxiety in risk society because they lack safety and security. Beck says that this situation will be a driving force of cosmopolitan cooperation, but which can be optimism. For example, anxiety does not necessarily integrate people and society in Japan. It is important to analyze the characters of locality instead of general principles to achieve cosmopolitan cooperation.

Moreover, Beck's statements may bring about unexpected results. He says that everyone on the earth is under the influence of global risks such as radioactive contamination. Such an opinion can be abused to obscure the responsibility of the perpetrators as a result the difference between the victims and the perpetrators becomes ambiguous. In spite of such a problem, the view of risk society theory is useful to reconsider the characters and the tasks of locality in relation to global risks.